

第三世界で働くということ

徳永瑞子

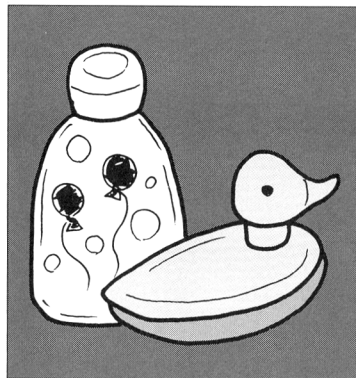
在中央アフリカ共和国、助産婦

5月18日土曜日の昼下がりに銃声が聞こえ始めた。何度か経験したことなので、そのうちに治まると高をくくっていたら、機関銃や大砲音が頻発するようになり、事態の深刻さを感じた。銃声は昼夜鳴り止まず、暴徒と化した民衆は企業や外国人の住宅の略奪を始めた。「ウォー」と群衆の声が近づいてくる。私は恐怖に立ちすくんだ。私たちは小さなリュックを背負い、ひたすらフランス軍の救出を待ちわびた。5日目に白い旗をたてた装甲車が救出に来てくれたときは、感激に震えた。私たちはフランスの軍事基地に収容され、翌日フランス外務省のチャーター機でパリに向かった。

私は、戦火の首都バンギを眼下に眺めながら、飛行機の中で第三世界で働くということを考えていた。第三世界の国々は、概して政治情勢が不安定で治安が悪い。それに、気候が厳しく衛生状態も悪く病気にもかかりやすく、必要時に適切な医療を期待できないという共通の問題を抱えている。私は、過去に内戦で2度、身の危険を感じたことがある。また、病気でヨーロッパに送られ手術を受けたこともある。マラリアには数回かかった。そして1976年、ザイルでエボラ熱が発生したとき、私はわずか180キロ離れた村で活動していた。私たちは原因不明で致死率の高い病気(後にエボラ熱と命名される)に戦慄し、生きては帰れないのではないかと不安におびえた。でも、私はいつもアフリカに舞い戻ってきた。

確かに、第三世界で働くことは

「リスク」を背負うことである。が、私はいつも多少の「リスク」を背負っても自分がやりたいことをやったほうが、自由で後悔のない人生を生きたらと思っている。「リスク」を避けて通る人生は面白くないだろうし、窮屈に思える。「リスク」は概してマイナスイメージで捉えられるが、私はむしろ「リスク」は限りない可能性を秘めた、自己発見の冒険だと思っている。



今回、10日間に及ぶ内戦が残したものは、街の破壊、私企業略奪による数千人の失業者、物不足と物価高で、それは今までの貧困に二重三重の輪をかける結果になった。特に、治安の悪化はわれわれ外国人の不安をかき立てている。今、私は日本人の協力者を失い、1人になった。そして、夜はピストルを持ったガードマンが私の住まいを守っている。私はピス

トルを見ながら、自分はなぜこうしてまでここに留まっているのだろうかと思う時がある。

内戦時、友人のシスターは頃として脱出を拒否し、1人が残った。「残られるのは信仰のためですか」と問うと、「違う」。「では何のためですか」と問うと、彼女は「友情のため」ときっぱり言った。私は彼女を説得するのをやめた。彼女の気持ちが理解できたからだ。

今、まさに私がここにいるのは、仲間たち(エイズ患者や職員)との友情のためである。私が、日々仲間たちから受ける友情のすばらしさは、どんな「リスク」をも背負えるほど偉大なものである。